月の糸

珍法句斎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月の糸

【Ｎコード】
Ｎ１０８９Ｚ

【作者名】
珍法句斎

【あらすじ】
小夜子と「僕」の日常。

垂れる雫（前書き）

昔ブログで書きためた。

垂れる雫

「私は後何年生きられるのかしら」

小夜子が、こちらを見ながら呟いた。さっきから、縁側で白く細い脚を何度も組みなおしている。僕がその仕草をちらりと見るたびに、小夜子は目を少し細めて口元を綻ばしていた。

「ねえ、お兄様ったら。答えてよ」

そう言いながら、僕の脚に自分の脚を絡めてきた。小夜子の、深雪のように白い肩から甘い匂いが香り、僕は少しだけ距離をあけた。なんで、こんなに歳不相応な香りがするのだろうか。僕の少しの動揺に気づいたのか、小夜子は僕との距離を詰めてきた。

「お兄様…」

僕は小夜子の言葉を唇でふさいだ。上唇を少し吸い、小夜子の唾液が僕の舌先を少し潤した気がする。唇を離すときに少し糸を引き、それが月明かりに照らされていた。僕と小夜子は、お互いの口から伸びるそれを見つめていた。

「私、お兄様の子供が欲しいわ」

小夜子は僕の目を見つめながら言った。

「でも、私はまだ初潮が来てないの」

小夜子は続けて言葉を紡ぐ。

「私、お兄様を愛してるわ」

「だって、お兄様のことを考えるだけ、こんなになってしまうんですもの」

そう言いながら、小夜子は着物の裾を捲くり、いきり立った「それ」をさらけ出した。根元に薄っすらと毛が生えてているが、まだ皮が被っている。その先からは透明な液が滴っていた。

「まだ作れないよ」

僕はそう言うしかなかった。その「まだ」がずっと来ないとわかっていながら。

「私、楽しみだわ」

月が雲に隠れ、小夜子の藍に近い黒髪が風景と同調する。それでも小夜子の微笑んだ顔だけははっきり見えた。
とても綺麗だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1089z/

月の糸

2011年12月4日00時47分発行